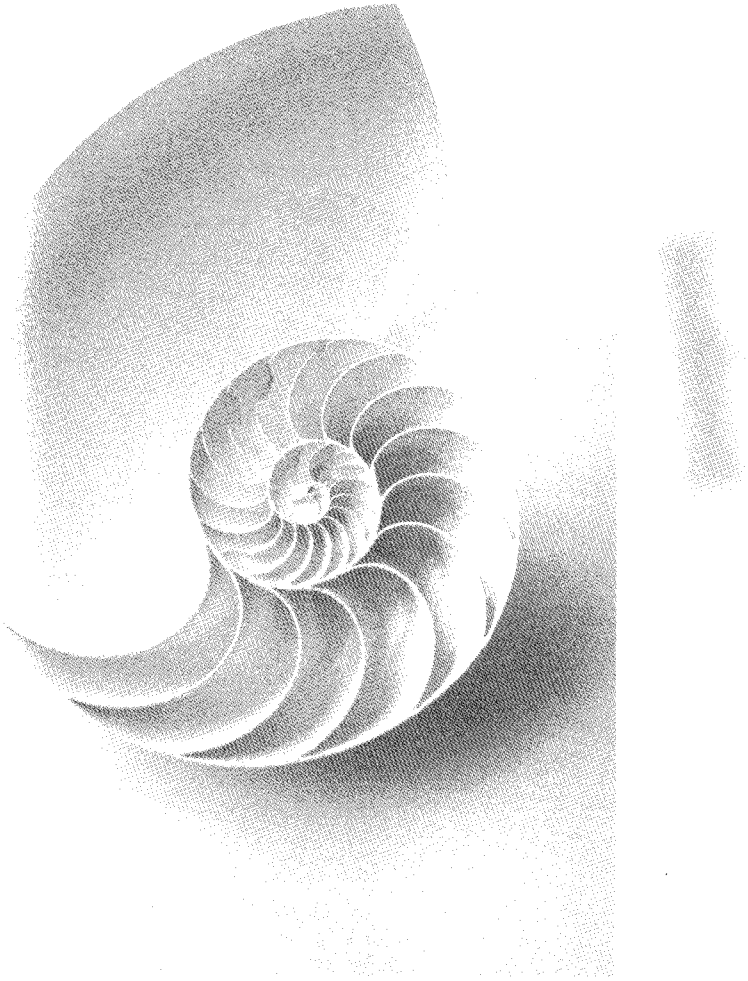
第6回

文窓賞優秀作品集



2012年10月発行

文窓会

神戸大学文学部同窓会

第６回　文窓賞
学生レポートコンクール 入賞作品

最優秀賞

該当者なし

優秀賞

「介護体験で学んだこと、そして夢へと生かす」
斉賀 万智

「5 年目の挑戦」
酒井 愛美

「東日本大震災と私の立ち位置」
酒井 友樹

佳 作

「マーシャル諸島で見つけたもの」
隅野 友加里

◎ **選考会**　2012 年9月5日

◎ **選考委員**

藤井 勝学部長（社会学教授）

長野順子副学部長（芸術学教授）

奥村 弘副学部長（日本史学教授）

池上　淑子　　鞍井　修一　　口高　健一

花木　直彦　　廣野　幸夫　　西川　京子

武藤美也子　　吉田　浩次　　宮崎　典久

田中　賢司　　坂本　直樹　　田中　睦子

優秀賞

介護等体験で学んだこと、そして夢へと生かす

斉賀　万智

あなたの心には、窓がありますか。そして、その窓は開かれ、外からのまばゆく、温かな光を受け入れることができているでしょうか。この春、私は介護等体験の場で、そのような心の窓を上手く開くことのできない方々と出会い、五日間という時間を共に過ごしました。そこの施設に通っている方々は、何らかの障害や心に負った傷などが原因で心の窓が閉ざされてしまっていたため、外とのコミュニケーションを上手く図ることができなかったのです。話しかけても十分にそれが理解してもらえない。そんな環境の中で、コミュニケーションなどとれるのだろうか、という底知れない不安が押し寄せる中、私の介護等体験は始まりました。

「身体の障害を抱えておられる方には、車いすや補聴器などの補助具があるんですね。しかし、ここに来ておられる方々は知的障害を抱えておられるため、そのような補助具がないのです。だから私たちの仕事は、彼らの補助具となって動いてあげることなのです。」職員の方のこの言葉は、即座に答えを見つけることのできない、重い課題を私に突き付けてきました。足が悪ければ、肩を組んで一緒に歩いてあげることができます。また目が見えなければ、手を握って正しい方向へと導いてあげることができます。身体における障害であるならば、補助すべき部分を視覚的に確認し、認識することができるため、行なうべき補助のイメージは自然と湧いてきます。しかし、知能における障害はどうでしょうか。身体における障害とは違って、補助すべき部分を視覚で確認することもできなければ、当人に詳しく尋ねることもできないのです。一体、“知的障害を補助する”とは、どのようなことを意味しているのでしょうか。

この与えられた課題について、知的障害を扱った小説であるパール・バックの『大地』に沿って考えていきたいと思います。この小説の主人公・王龍は、革命前の中国という激動の時代を生きるために奔走するのですが、その目まぐるしく変化する時代の中で唯一変わらないものが、知的障害を抱える娘への溢れんばかりの愛でした。「もしこの子が、他の子のその頃のように、丸々と肥って元気だったら、王龍は可愛がらなかったことだろうが、—彼女を見ては、時々彼は優しい声であやしていた。」とあるように、彼は娘に対して優しい眼差しと慈しみを一心に注いでいたことがわかります。また、ひどい飢饉に見舞われ、食糧が底をつきそうになった時も、隣人に譲ってもらった少量の豆を柔らかくかみ砕き、惜しげもなく娘に与えていました。そしてそれを食べる娘の姿を見て、彼自身をも満ち足りた気分に浸っていたのです。これらの描写から、この娘が王龍の深い愛情によって支えられ、生かされていたことがよくわかります。この作品中において、娘は「特定の年齢になっても何も話さない子」として描かれており、父親に感謝するような言葉などもちろん述べてはいません。しかし、きっと彼女は自分がどれほど大切にされ、愛されているのかがわかっていたのでしょう。たとえ、その事実が

頭では認識できていなかったとしても、彼女は細胞でしっかりと感じ取っていたのだと私は思います。つまり王龍は、愛情というツールを介することによって、愛する娘と意思疎通を行なうことに成功したのです。言葉に頼らなくても、相手を大切に思う気持ちや態度を持ち続け、そしてそれを全身で、自分の大切に思う相手に伝え続ければ、いつかその努力が実を結び、意志疎通を行うことが可能となるのです。実際の現場においても、この物語で出会ったような瞬間が多く訪れました。「おはようございます」「今日も暑いですね」などと話しかけても、なかなか思うような返事は返ってきません。しかし、こちらが何気なく微笑むと、ちゃんと笑顔を返してくださるのです。また、手を握ると、優しく握り返してくださるのです。つまり、言葉を発したり、理解したりすることが難しい知的障害者の方と意思疎通を行なうためには、王龍が言葉では表現し得ない深い愛情によって娘とのコミュニケーションを図ったように、言葉以外の方法で、意思を伝達しようと努力することが必要不可欠となるのです。したがって、知的障害者の方の補助とは、彼らがコミュニケーションをとりやすいような環境を整えること、つまり、こちら側が笑顔で接したり、また優しく触れたりして彼らの心の窓についてしまった錆を懸命に落とし、少しでも窓に光を差し込ませようとする作業を意味するのだと、私は考えます。彼らは、自分の力だけで心の窓を開けることができないため、私たちはその部分を補助してあげなければならなかったのです。心の窓を開くためのきっかけは一人一人異なるため、それを見つけるのは非常に難しいものですが、一つ言えることは、あたたかな笑顔が心の窓の錆を落とす大きなきっかけになり得るということです。たとえ、言葉が話せなくても、通じなくても、こちらに笑顔と相手のことを理解しようとする姿勢さえあれば、相手は警戒心を解き、こちらを向いてくれるのです。

介護等体験を通して学んだこと。それは、心の窓の開き方は決して一様ではなく、人それぞれで異なっているということ。特に、笑顔で相手と接するということは、相手の心の窓を優しくノックする素敵な方法であるということ。そして何より、お互いの心の窓を開いて会話をしたり、接したりすることこそが、真のコミュニケーションであるということ。この五日間、利用者の皆さんと満足に会話を行うことができたとは決して言えませんが、こちらが笑顔で接すると笑顔を返してくださったり、手を握ると力強く握り返してくださったりと、言葉というツールを超えて、心での会話のキャッチボールを行うことができました。そこには、言葉だけでなされるうわべのコミュニケーションでは決して得られない、心地よい空間とあたたかな幸福感がありました。そして、「つながった」そう実感できた瞬間は、彼らの心の窓に一筋の小さな光を差し込ませることができた、かけがえのない瞬間にほかなりませんでした。

この介護等体験で学んだことは、私の“教師になりたい”という夢にそのまま応用できると思います。目をそらすことなく、生徒一人一人にしっかりと向き合い、根気強く理解しようと努力し続けることができれば、時間はかかるかも知れませんが、いつか必ず、生徒の心のわだかまりを解きほぐしてあげられるはずです。そして、生徒と真のコミュニケーションをとることができるはずなのです。

現在、いじめや不登校などといったような問題が全国の教育現場で起こり、教師の力不足が叫ばれています。しかし、なぜ教師はこのような問題に太刀打ちすることができないのでしょうか。それは、多くの教師が、そのような問題を抱えている生徒たちの錆びついてしまった心

の窓を上手く開いてあげられないからだと私は思います。いじめをしてしまう生徒もまた学校に行けなくなってしまった生徒も、自分の心の中にある何らかの原因によって生み出された思いに苦しんでいるのです。その心の叫びを表現する方法は異なっていますが、どちらの生徒も誰かに自分の思いを吐露したい、そして理解してもらいたいという思いは同じなのです。教師は、そのような心に傷を抱えて生きている生徒の思いを理解するために、必死の姿勢で向かっていかなければならないのです。たとえ、反発を受けても、また多くの時間を要してしまったとしても、諦めずに生徒の声に一心に耳を傾けていれば、必ずどこかで心の窓を開くためのきっかけがつかめるのだと思います。何度も何度も生徒とぶつかり合って、窓についてしまった錆を根気強く落としていくことが、お互いを理解しあうために必要不可欠なのです。

「斉賀さんは尊敬する先生おる？おるんやったら、その先生はきっと生徒の心の窓を開くのが上手いんやで。斉賀さんもそういう先生になりや。」初日に施設長さんからかけていただいた言葉。今、こうして振り返ってみて初めて、施設長さんがこの言葉に託したメッセージに気づくことができました。確かに、勉強を教えるのが上手かったり、生徒に優しく接したりすることのできる教師は、生徒から信頼され、慕われます。しかし、それらの条件を満たすだけでは、生徒のことを真に理解している教師だとは言えないのです。生徒の心の窓を上手に開くことのできる教師こそが、生徒の心を深く理解することができ、そして、生徒と偽りではなく、真の信頼関係を築き上げることができるのです。教師となる上で、大切なことに気づかせてくれたこの言葉は、きっと、これからの私の人生の指標となり、そして辛い時、そっと背中を押してくれる存在になるに違いありません。

あなたの心には、窓がありますか。そして、その窓はまぶしい外の日差しを受け入れることができているでしょうか。きっと世の中には、これらの質問に“ノ―”と答える子どもが少なくないでしょう。それはつまり、何らかの理由で自ら心の窓を閉ざしてしまっている子どもが多いということです。そんな彼らに手を差し伸べ、救うことができるのは、教師の存在であると私は考えます。その際、心の窓を無理矢理にこじ開けようとするのではなく、優しく開いてあげられるような、そんな教師になりたいと強く思います。

【参考文献】

・『大地』パール・バック　作 小野寺健
訳 岩波書店
・「ノーマライゼーション障害者の福祉文学にみる障害者像 パール・バック著
『大地』～知的障害のある娘への親の眼差し～」於保真理　2004年8月号

優秀賞

5年目の挑戦

酒井 愛美

ボート部は朝が早い。合宿所に泊り込み、4時起床の早朝練習。艇に乗り込み、岸を蹴り出したら、今日もしんどいメニューが待っている。女子の花形種目である5人乗りのクォドルプルは、全員の息の合ったパフォーマンスが必要だ。毎朝後輩たちに檄を飛ばし、クルーを引っ張る。なんとしてもインカレでの勝利を今年こそ掴み取りたい。そんな思いを共に持ち、苦しい練習を皆で励ましあいながら乗り切るこのチームは、私の自慢の仲間たちだ。今、私は5年目のシーズンに全てをかけて、毎日をボートに捧げている。

私は留年をしており、いわゆる「5年生」だ。留年の理由は、就職活動をやり直すため、それだけである。昨年、厳しい就職難で、なんとなく受けた企業は全て落ちてしまった。震災の影響で選考時期が遅れて、部活のシーズンにもろかぶりしたのも痛かった。生まれて初めての挫折だったように思う。気がつくと、夏採用を行っている企業に、夏採用を行っているからという理由でエントリーし始めていた。もちろん落ちた。

私がやりたいことは一体何なのか。どこでもいいから就職して、とりあえず働きたいのか。これには悩んだ。とにかく働き始めることで、そこからまた新しい道が見えてくる、と助言をくれた人もいる。しかし私はどうしても納得がいかなかった。自分が本当にやってみたいと思える仕事を、自分で選んで納得した上でスタートしたい。「この仕事、本当にやりたいのかな、合っているのかな」と探り探りではなくて、自分自身の100%をかけて全力で働きたい。たとえ苦しくても、自分の選択を信じて、自分が目指すところに向かって、まっすぐに走るのが自分のスタイルだからだ。それはボート部での4年間を振り返って確信したことだった。留年して、しっかりやりたいことを明確にし、来年もう一度挑戦したい。おのずと意思が固まった。

もちろん、それがわがままだということも分かっていた。自分が行きたい会社に行けるように、しかもそれが叶う保証などないのに、もう一年学生でいたいというのは勝手と言われても仕方がない。そんな経済的な余裕がない家庭も少なくない。それでも私の言い分を、両親は支持してくれた。きっと私以上に不安だったに違いない。そんな両親への感謝の気持ちを忘れないことを、心の中で誓った。

さて、この再チャレンジを決めたのが昨年8月だったのだが、次の面接シーズンまでどう過ごすのか、かなり悩んだ。長期で被災地東北のボランティアに行くも良し、半年ほど留学するも良し。たくさんの人に意見を仰ぎながら、私が最終的に決めたのは、「もう一年漕ぐ」だった。就職留年をしたからと言って、企業研究やインターンシップなど就職活動だけの一年は、寂しいし息が詰まりそうだと考えた。大学も休学しているし、だらけてしまいそうとの懸念もあった。何より、「私はこれを頑張っています！」。そう言えるものがない生活は、嫌だっ

たのだ。部活をしていれば必ず苦しいことがある。それは全力で何かに取り組んでいれば必然だ。そんな苦しい局面があろうことも含めて、「頑張っている自分」を日々感じていたかった。そしてもちろんボートが好きだということも大きかった。ボート部の練習は本当に厳しい。練習中、今すぐ艇から飛び降りたいと何度思ったことか。それでも、風を切って進んでいく快感、仲間と息の合った漕ぎが出来たときの喜び、ギリギリの競り合い、そしてその向こうにある達成感。それをもう一度味わいたいと思った。あまりの辛苦に、引退することを「出所」だなんてふざけて言うこともあるくらいのボート部だが、あえてもう一年その「監獄」で過ごすと決めた。

後輩たちとの合宿所生活の傍ら、よりよい就職活動を行うべく、私は自分自身を見つめ直して何がしたいかを考え、世の中にどのような企業が存在しているのか、調べ直した。一からの出直しだ。前者は自己分析、後者は業界研究や企業研究と呼ばれるもので、殊に最近の就職活動では、耳にタコが出来るほど重要と叫ばれている作業だ。就職活動を始めたての学生にとっては当然初耳で、身構えてしまいそうだが、要は自分を知り、社会を知り、その中で自分は何を選ぶかということを考えるだけだ。後輩たちには、下手に「シューカツ用語」と思い込んで欲しくない。

自分はどんな人間で、何がしたいのか。小さな頃から今までで、自分はどのような選択をしてきたか、またその理由は、など細かく洗い出した。昨年度よりも真剣に、時間をかけて自分と向き合った。走り書きのノートがどんどん埋まっていく。20余年という短い人生経験でも、たくさんの分岐点や思い出があり、書き出すうちに自分という人間の輪郭が、完璧ではないがなんとなく掴めるようになってきた。ずっと部活をやってきて、苦しいと分かっていたのに大学でも部活を選んだこと、辛くても仲間と頑張れる自分が好きなのだということ、その辛さの向こうにこそ求めるものがあるということ、だからこそ今も漕いでいること…。書き出せば綺麗事のようだが、全て実体験をもって感じたものだ。私はいつまでもそんな自分でいたいと思った。過去や現在の自分の姿と、これからこうありたいという理想が、少しずつ見えてきた。

そして企業研究にもかなりの時間と労力をかけた。なにせ世の中には数え切れないほどの職場がある。とにかく食わず嫌いを避けるため、ありとあらゆる業界の企業説明会に顔を出した。未知の業界で、日本にはこんなにも面白い会社があるのかと感心したことが何度もあった。また、昨年も志望していた企業では昨年の説明会との違いを感じることも多く、採用担当者のこの一年の仕事ぶりに思いを馳せるなど、自分のことで精一杯だった一年前と比べ、視野が広がった気もした。

中でも最も強い関心を持ったのが、報道の仕事だった。特に新聞社やNHKといった、いわゆる硬派マスコミに惹かれた。もともと新聞は好きで、よく読んでいたし、記事に影響を受けることもしばしばあった。説明会では最前線で活躍する記者と話をする機会も多かった。弱い立場の人々の声を拾い、社会問題として提示する。権力の監視という使命を背負い、民主主義の根幹を支える。そうして明日の日本が少しでも良くなれば…。まさに綺麗事と呼ばれて仕方ないほど熱いフレーズだ。しかしこんな大きな使命感を持ち、熱く仕事が出来るなんて、幸せではないか。なんて格好良いんだろう。自分も記者になりたい。ただ単純にそう思った。

しかし記者の仕事はとにもかくにも泥臭い。日付を超えて勤務することも、いきなり休みに

呼び出されることも、休み自体がない時期もある。事件事故の遺族取材も大変につらいはずだ。どの社の記者も口を揃えて、地味で激務だと公言する。ただなんとなくマスコミに憧れて、というだけでは通用しないのが新聞記者なのだろう。OB 訪問を行った際ももちろんそういった話題になった。しかしそんなことを言われたところで、もはや私の気持ちは揺るがないところまで達していた。「望むところだ」。わざわざ時間を割いて下さった先輩の前では謙虚さを保ちつつ、内心ではそう思っていた。

「大変につらい」とか「自由な時間がない」とかそういう基準で自分は選択をしてこなかった。その先に自分の求めるものがあるかどうかで、あえて苦しい道を選ぶことも多かった。部活を始めるときも、苦しい毎日や、壁にぶち当たることは予想出来たし、一歩を踏み出すのには勇気がいった。でも後悔したことは一度もない。最後まで漕ぎ通し、やり遂げた達成感。わくわくするほどハイレベルな競り合い。それらを共有した、生涯付き合える仲間たち。これを知ってしまうと、もう後には引けないのだ。

気持ちが固まると、エントリーシートもすらすら埋まっていった。面接でも、堂々と話せた。「面接テクニック」とかそういうものは一つもなかったが、ただ素直に正直に、暑苦しいほどの理想を言って聞かせた。頷いてもらえるたび、嬉しかった。めまぐるしく面接をこなす中、4月 14 日、希望の新聞社に無事に内々定をもらう事が出来た。

振り返ると長いようで短かった。留年を決めてから、自分に向き合い社会に向き合い、なんとか自分のやりたいことを見つけられた。一年もかかったのは自分の甘さや不器用さによるものだが、今となってはその時間こそが大切だったと言える。納得のいく就職活動が出来たのは、単に運が良かったのかもしれない。しかし、やはり諦めないで探して良かった。将来に対する底知れない不安で、苦しかった時期もあったが、両親や友人、先輩方など多くの人に支えられた。自分は一人ではないと思い直すたび、また頑張ることが出来た。この一年で学んだことは、就職に関わることだけでは、決してなかった。

今、私は就職活動を終え、部活動のボートに専念している。厳しい練習メニューに心が折れそうになることはあるが、それでも仲間と一緒だからこそ乗り越えられる。インカレという最高の舞台で、このメンバーと決勝に行くという目標を達成したい。厳しい環境であっても、そういった目標があり素晴らしい仲間に囲まれている限り、頑張れる。そういう毎日が、私にとってはすごく楽しく、宝物のように感じるのだ。何かに一生懸命に打ち込むというのは、本当に楽しいことだ。道程が長く厳しいほど、ゴールでの喜びも大きい。もう一年漕ぐと決断して、苦しい時期はもちろんあった。それでも、その選択を悔いたことは、一度もない。

目標に向かってひた走る毎日が、楽しくて、輝かしくて、大好きだということが分かった。そしてその気持ちを大切にして将来の仕事についてもしっかり考えられた。ボート部での経験に、感謝してもしつくせない。この夏、自分のために、みんなのために、必ず結果を残したい。最後の一瞬まで努力しよう。レースの後、仲間と笑顔でハイタッチをする、その瞬間を楽しみに。

そして私は来年の春、憧れの新聞記者になる。身震いする。

がんばらなきゃ。がんばりたい。そんな自分が、好きだから。

優秀賞

東日本大震災と私の立ち位置

酒井 友樹

1.

2011年3月11日、私はテレビ画面を前にして言葉を失った。何度見ても、あの世とこの世が逆転したかのような光景が現実のものだとは、考えづらかった。

東日本大震災の発生以来、私は報道で悲惨な映像を眺めるたび、何も行動出来ていない自分への無力感と罪悪感に苛まれていた。そんな時、目にしたのが昨年秋の文窓賞のこの講評だ。

「この大震災に対して自分の立ち位置を定めてほしい」

私の立ち位置とはどこにあるのだろう。決して家族や知人が被災したわけではない。そんな自分が、真に痛みを共感できるのか。そもそも、この甚大な被害に対して、学生の私など無力ではなかろうか。私はこの言葉をきっかけに煩悶を繰り返した。

そして自らの「立ち位置」を求めるべく、昨年11月下旬、私は岩手県沿岸部の被災地に立っていた。

閑散とした荒野に、冷たい風が吹き抜ける。大まかに瓦礫は撤去され、家の土台部分だけが点在していた。唯一残った鉄筋の建物も枠組みだけで、そこに流れてきた藻や瓦礫が絡み付いている。5階建てのアパートは、4階までが津波でぶち抜かれていた。

もしも自分の住む街だったとしたら、と考えるだけで目頭が熱くなった。

「毎晩、ここに来て涙を流すんです」

と仰る被災者の方もおられた。

レンタカーのカーナビから目印の商店などがアナウンスされるが、実際にはフロントガラスの向こうは何もない。そこにあったはずの街が消えた、という不気味な感覚に耐えられなくなった。

震災から8ヶ月が経過して、既に復興しているだろう、というのは甘い考えだった。陸前高田市は津波の爪痕が生々しく残っており、新たに何かを建設しようという様子はまだない。釜石市では未だに信号が止まったままの地区もあった。建物の壁に赤いスプレーで書かれた、遺体回収を伝える丸やペケの印が、残酷な現実を物語っていた。全く復興が進んでいない光景をまざまざと見せつけられた。ここへ来るのは遅きに失したかと憂慮していたが、逆にこの現実に直面して、私に出来ることなどあるのかと、立ちすくむような思いになった。同時に、日本の将来を担う学生は誰もが、この風景を目に焼き付けておかねばならない、決して忘れてはならないと感じた。

神戸大学が定期的に派遣しているボランティアバスで、私はこれまで11月、2月、5月と3度被災地に足を運んだ。主な活動は仮設住宅などに住む被災者のコミュニティー支援。主軸となる活動は「足湯」と「手芸」だ。

実を言うと足湯や手芸と聞いて、初めは拍子抜けした。そんな呑気なことをしている場合なのかと懐疑した。もっと先にすべきことが、あるのではないかと思った。しかし次第にその考

えは変化していく。

足湯とは仮設住宅の集会所へ赴き、被災者の方にお湯を張ったタライに足をつけてもらい、手をマッサージしながら、コミュニケーションを取るというもの。学生や住民同士の交流の機会にしてもらうのが狙いだ。

私が初めて足湯したのは、目の不自由なお婆さん。

「今日も寒いですね」

など、他愛もないことから話しかけてみると、あちらもぽつりぽつりと話してくださる。そうしているうち、亡くされた家族や親類のこと、津波から間一髪で避難した話など、いつの間にか初対面と思えないほど深い話をしていることに気づいた。足湯というツールを介して、遠く離れた人間同士に結びつきが出来た事を感じた。

集会所では足湯と並行して、「まけないぞう」という手芸を行っている。これは、タオル1本で作る手芸で、完成すると像の形をした壁掛けの手拭きになる。

しんしんと雪の降る2月の出来事。小学5年生の礼儀正しいが物静かで無口な女の子が、足下の悪い中、集会所に訪れた。誰がいくら話しかけても、殆ど何もしゃべらず、他の子供たちとも遊ばない彼女。そんな様子を見て、私は「まけないぞう」を一緒に作ろうと勧めてみた。最低限でも作り方を伝える必要があるので、手作業をしながら自然に会話が生まれる。一緒になってぞうを作っていくうち、彼女は次第に重い口を開き始めた。完成に近づくと、最初はあんなに堅かった表情も、自然と笑顔になっていた。また家でも作りたいと言うので、作り方を手書きで紙に書いて教えてあげた。帰ってからも自分で2個は作るのだとか。手芸でここまでコミュニケーションが取れるのだと自分でも驚いた。

「まけないぞうを集中して作っている間、初めて津波の辛い思い出を忘れられた」

という声もよく聞かれる。また、NGOを通じて何百個という単位で作って販売されている主婦の方々もいる。交流の手段というだけでなく、気を紛らわしたり、生き甲斐になったりもするのだ。

2.

仮設住宅は未だに、住民のコミュニティーが出来ていない所も多い。行政の平等主義によって、抽選で住まいが決定したため、元々住んでいた地域の共同体が解体したからだ。別々の地域から集まった住民が自宅に引きこもることが多々ある。

阪神淡路大震災でも同様の事が問題になった。兵庫県内では今日に至っても、高層マンションが立ち並ぶ災害復興住宅で、総数700人を超える孤独死が問題とされる。

神戸と同じ間違いを繰り返してはいけない。引きこもりがちな単身の高齢者の方などと、こうして集会所で交流する事で、少しでもその助力になりたい。足湯や手芸はそういった願いから行っている活動なのだ。

勿論、瓦礫撤去のようなハード事業も必要だが、同時にこうした被災者の心に寄り添うソフト面の活動も重要だ。労力や物資のニーズにしても、直接コミュニケーションをとって初めて分かるはずだ。例えば、行政からガスストーブが支援物資として送られてきたが、老人の独り住まいのため、火事が怖くてガスは使えない。だから自分で電気ストーブを買った、という話も伺った。一方通行の支援は被災者のためにならない。

そして、普段は会う事のない学生にだからこそ、言える話もあるそうだ。自分に辛い事や嬉

しい事があっても、もっと酷い目にあった人がいるのだから、と誰にも伝えられない現状がある。なにより、被災した方々は、自分が置かれた状況を他者に分かってもらいたいのだと感じた。私でもその受け皿になれるのだ。

また、こうした集会所に集まる機会を通じて、知り合い同士が再会し、そこで初めて同じ仮設住宅に住んでいたと分かることもある。住民の方同士が交流する機会を設ける事で、コミュニティー形成の一助にもなる。

「津波のおかげで、こうして色んな人と出会えた。津波様々だね。」

と仰る方がおられた。これが被災者の言葉でなかったら問題発言になるかもしれない。しかし、これを単なる不謹慎な言葉として片づけてはならないと思う。恐らくこの方は、震災以前の方がより孤独だったのだろう。コミュニティーの崩壊や孤独死の問題は、過疎化や少子化に伴って、この地域の潜在的な課題だった。ただ、平和な日常の中で見えにくかっただけなのだ。それが、非日常な状況に置かれたことで、浮き彫りになったのである。私たちにとっても、震災から浮かび上がった課題は他人事ではない。

私が気になったのは、被災地での子供のストレスだ。仮設住宅の集会所で活動するうち、そこに住む子供達が異常なまでに暴力的なことに気付いた。男女問わず叩く、蹴るなど、遊び相手になったボランティアに暴力を奮う。単にこちらが甘やかすせいなのだろうか。

こんなことがあった。小学生と遊んでいると、その子の服が汚れてしまったので、着替えてくるように勧めると、

「面倒臭いから嫌だ」

と拒んで、いくら注意してもそのまま遊んでいる。だが後から、

「パパが津波で流されてママが大変だから、洗濯物を増やしたくないの」

とぽつり。先程の無邪気な顔が嘘のように、大人の顔を覗かせた。

こうして子供達は大人に気を遣いながら生きている。彼らは親を亡くし、学校の統廃合で環境も変化し、心のバランスを欠いている。近くに公園がなく、他に安全な遊び場も少ないので、仮設住宅の敷地内で騒ぐ子供達を、迷惑に感じる大人も多い。家の中に入っても防音が乏しいため、静かにさせられている子供達は、ストレスが限界に達しているのではあるまいか。しかも、親である現役世代は、親の介護や自分の職探しなどで負担を一身に背負い、子供の世話まで手が回らない。しわ寄せが来るのはいつも子供たちだ。せめて、私たちが行った時だけでも、遊び相手になるようにしている。

公に主張する術を持たない子供達を、議論から置き去りにしてきたように思う。これは同時に、現代の子供たちが置かれる一般的な状況でもある。都市化や親の共働きなど、被災地外にも重なる部分があるだろう。

3.

被害は阪神・淡路大震災の数倍もあるにも関わらず、東日本大震災の現地でのボランティアは当時の半分にも満たない。一方で、被災地に物見遊山に来て、瓦礫の前でピース写真を撮って帰るという人もいるそうだ。もし、被災者の方と１人でも関わりがあれば、そんな無神経なことは出来るはずもないのだが。

程度の差こそあれ、私を含め被災していない人間は、想像力が乏しすぎるが故に、時に無神経な言動を取ってしまう。私たちは簡単に「瓦礫」と呼ぶが、元は誰かの住んでいた大事な家であり、家財道具であったのだ。それを、誰がごみのように厄介者として扱えようか。誰が「片

付いてきれいになった」と表現出来ようか。被災地外との大きな感覚のずれを感じずには居られない。その「ずれ」が復興への方向性を誤る原因にもなるだろう。

神戸は阪神・淡路大震災の発生からわずか2か月で都市計画が出来、ハードの復興は迅速に進んだ。その代わり、まだ心の復興が追い付かない状態で、街並みは震災前とすっかり変わってしまった。

現在、東日本の被災地では人の手による瓦礫撤去の光景を目にする。私たちも現地のボランティア・ネットワークの団体を通じて加わっている。恐らく、ボランティアが手で泥出しや家屋整理するよりは、どうせ解体するのなら重機を使った方がスピードは速いだろう。だが、残った写真や遺品などを人の手で仕分けて持ち主に届ける方が、被災者の心を少しでも癒す。重機が動いているよりも、沢山の人間が必死で作業している光景の方が、被災者を勇気づけることにもなる。私はここに来るまで、なぜもっと早く復興が進まないのかと考えていた。だが、スピードや効率が全てではない。政治や経済のための復興では本末転倒だ。あくまでも主役は人なのである。人の「心の復興」を忘れてはならない。

こんな出逢いがあった。集会所での活動の告知と共に、交流などの為に行っている仮設住宅の戸別訪問で、11月に訪れた際に話をしてくださった80代の女性。彼女は東京に私と同じ年齢の孫がいるが、殆ど会いに来てくれないらしく寂しそうであった。夫を亡くし、今は独り身だそうだ。私はそのお婆さんを集会所に誘ったが、体調が良くないからと断られた。とはいえ、すぐに玄関扉を閉めることもなく、ぽつりぽつりと話されるので熱心に聞いていた。

そして別れ際に私が、

「春休みにも来ますから、またお会いしましょう」

と何気なく言うと、

「そのときには、もうこの世にいないかもしれない」

と重々しく言われた。思わず、

「どうしてですか」

と聞いてしまった。

「癌だからその時まで生きているか分からないの」

とぽつり。私はどんな言葉をかけて良いか途方に暮れた。最後までどう返すべきか分からなかったが、思い切ってこう言った。

「春にまた来ますから、その時まで、絶対に元気でいてくださいね」

すると、

「分かった」

と一言。互いに手を差し出し、しっかり握手した。

涙目になりながら別れを告げた。次に元気な姿で会えることを心から願った。

そして、2月。再びその方の住む仮設住宅を訪れた。表札が変わっていない事を確認して、祈るような思いでチャイムを押す。

すると、ご健在だった。あちらも覚えていてくださり、再び固い握手を交わした。以前、ずっと会っていないと言われていた孫とも近く会うのだとか。

「せっかく助かった命だから、頑張らなくっちゃね」

と前向きな御様子だった。遠く離れた地に新たな故郷が出来た気がした。また来ますと言って別れた。その後、5月にも会う事が出来た。今後も足を運びたいと思っている。

私たちに大きなことは出来ないし、実際にしていないのかもしれない。しかし、私たちは本当に、無力なのだろうか。

震災から1年以上を経て報道も減り、被災者には、自分たちが忘れられてしまったのではないか、という孤独感があるように感じる。そんな時、私たちが「神戸から来ました」と言っただけで、

「こうして、遠くから来てくれるだけでも、まだ、私達のことが忘れられていないのだ、と希望が持てる」

と涙を流して下さる方がおられる。他にも、ボランティアの私たちに「頑張って」と逆に励ましの言葉をかけてくださる方や、わざわざ差し入れを下さる方、中にはお礼の手紙を送って下さる方までおられる。また、

「震災直後はすべきことが沢山あり、その日生きることで精いっぱいだった。だが、1年が過ぎて状況が落ち着くにつれ、やることが減ってきた。そうなって、近頃、急に悲しみが押し寄せて来た。3月11日より、もしかしたら今の方が、悲しみは大きいかもしれない。」

という声もある。時間が経ったからボランティアを減らしても良い、という事はない。今だからこそ、こうした「心の復興」のための活動が更に重要なのだ。

毎回、ボランィアバス参加者全員が真剣に被災者と向き合い、考え、悩み、そして迷っている。活動中に生じた様々な苦悩、疑問、心のもやもやを、毎晩のミーティングで話し合って深め、翌日の活動の改善に繋げている。

運営そのものにも課題は山積みだ。50人近い参加者で、スムーズに活動するのは至難の業。勿論、誰かに指示されるのではなく、各々が自主性に任せて動くのが理想的だ。しかし、組織が大きくなると、自分が今何をすべきか見えづらくなる。参加2回目以降は企画段階から関わり、組織づくりなども工夫した。

一方、多種多様な高い意識の学生が集まった事で、沢山のアイデアが生まれた。たこ焼きやお好み焼きの提供、子供との触れ合いに特化した企画、看護学生による血圧検査、資金集めの募金活動やネットでの広報……。これらが皆、実際に学生の提案と企画で実現した。他にも、地元の方のニーズをお聞きして、河川の清掃や畑の耕作、花壇作りなどもしている。今後も街灯の設置など、新たな企画を展開する予定だ。

学生だからこそ、1人ひとりに寄り添うことが出来る。見落とされがちな個々人の「つぶやき」を拾い上げていく事が出来る。そんな、きめ細やかな、地域に密着した活動を今後も継続したい。私の立ち位置は被災者のすぐ隣だ。

佳　作

マーシャル諸島で見つけたもの

隅野　友加里

「マーシャル諸島共和国、そこは私たちが失くしてしまったものが今なお根付く未開の宝島でした。」帰国後、私は市民ホールで熱を込めて講演をしていた。

去年の夏、私はマーシャル諸島共和国という国に2週間滞在した。私の住んでいる大阪府堺市からグローバル人材を育てるプログラムの一環として、毎年マーシャル諸島に青年を数名派遣している。そのプログラムに私は参加した。去年の春から行われた選考に合格し、マーシャル諸島に派遣が決定した時、正直マーシャル諸島に関する知識はほとんどなく、名前さえも知らなかった。ただ夏休みということで時間があったこと、新しい経験をしてみたかったこと、これらを理由に応募を決意した。それから毎週研修があり、座学を通して少しずつマーシャル諸島を理解していった。プログラムの目的は文化交流や現地の人々のふれあいを通して、マーシャル諸島について理解し、学んだことや感じたことを帰国後に堺市に広めるというものである。それと同時に日本についても現地で広める活動をする。さらに個人で何かテーマを考え、それについても研究をしていかなければならない。私はマーシャル諸島の観光産業をテーマに決めた。そして8月に漸く現地に赴いたのである。座学で理解していたものと現実は全く違うものだった。百聞は一見に如かず。まさにその通りだ。まず空港に着いた時、空港がなかった。プレハブのようなところでパスポートをチェックし、入国手続きをする。バゲッジクレームのようなものはなく、預けた荷物は飛行機から自分で取るのだ。今までさまざまな国を訪れたが、このような国は初めてだった。私たちが空港に到着すると、現地の大学生が私たちを歓迎してくれた。ホテルに向かうため、バスに乗った。舗装されていないがたがた道、視界に入ってくるエメラルドブルーの海、聞こえてくるのははしゃぐ子供たちの声、あまり嗅いだことのないフルーツの香り。異国に来たのだと肌で感じた。ここでマーシャル諸島について述べたいと思う。マーシャル諸島はグアムとハワイの中間に位置する島国であり、1986年にアメリカから独立した。首都はマジュロで人口は約6万人。50年後には消えてしまう恐れのある言語の一つであるマーシャル語という言語が使われている。しかし国民のほとんどが英語も話すことができたので、私たちは英語でコミュニケーションをとることができた。国にホテルは2件、レストランは10店舗、大学は1校、病院は1施設、工場は1棟。農業や工業、観光業はほとんど発展しておらず、国はアメリカ基地からの収入で成り立っている。日本から青年海外協力隊員として働いている人が数名いた。私たちは珍しい観光客として一気に注目を集めた。

2週間の滞在の間、私たちはさまざまな活動をした。大統領と面会し、審議中の国会を見学し、現地の学校に行って授業を見学し、病院を見学し、ごみ処理場を訪れ、離島を訪れた。国会議員とはまた別の権力者であるイロオジと呼ばれる人々の話を聴き、アメリカ基地による過去の水爆実験の被爆者の方の話を聴き、伝統工芸品の作り方を学んだ。一見、平和で素晴らしい海に囲まれた島国のように思えたが、存在している社会問題は深刻だった。一つはごみ問題。近年、外国からの輸入品が増え、経済が活発になってきたのとは裏腹にごみが増大している。

そもそも国にごみ処理場がないのである。国の最も標高の高い場所はごみの山という現状である。他にもエイズ問題や海抜上昇問題、糖尿病や離島の無人島化などが存在していた。

そんな中、私たちは現地の大学生と交流する時間があった。国は違うが、同じ大学生。私たちはすぐに打ち解け、色々な話をした。特にお互いの国について話をした。日本について現地で広めることも私たちの目的の一つである。そのことを意識して、日本の文化や教育、政治、観光地について教えた。私の研究テーマが観光産業ということもあり、マーシャル諸島が観光産業をどう発展させていけばよいか、などの自分の考えも述べた。彼らは私の話に熱心に耳を傾けてくれ、彼らも自分自身のことや国のことについて語ってくれた。そこで私は衝撃を受けた。彼らのほとんどがすでに結婚しており、子どもも何人かいるという。私の頭の中で始めに思い浮かんだのは、避妊の知識などが不十分で教育制度も十分に整っていないのではないか、ということだ。しかし実際は違った。マーシャル諸島では家族や地域の認識が日本と異なる。住居のある一帯に住んでいる地域の人々はみな家族のようなもので、子どもは地域の人々で育てていく。だから親が大学生であることは全く問題がない。ゆえにマーシャル諸島では大学生くらいの年齢で結婚、出産するのが普通らしい。地域みんなで食事も与えるし、おむつも替えるし、教育もする。みんなで育てるから安心で、地域の団結力も増すのだという。日本と全く違う、ふと大切なことに気付かされたような気がした。私は無意識のうちに、発展途上国のマーシャル諸島よりも先進国の日本の方が上だという考えを持っていた。何がどう上だという具体的なものではなく、ただ全てが優っていると思っていた。その考えのために、文化交流のはずが彼らに対して、日本のことをまねしてマーシャル諸島が発展すべきだという持論の強要になっていた。見習わねばならないのは私たちのほうではないか。私は自分の考えを恥じた。もちろん日本が世界に誇れるものは、衛生環境、技術、国の仕組み、マナーなどたくさんある。しかし、それに加えて日本が世界から学ばなければいけないこともたくさんある。日本では今、地域の関係の希薄化が甚だしい。マンションの隣の住人の顔を知らないのも日常茶飯事である。地域というコミュニティがうまく機能していないために、防ぐことのできる犯罪も防げなくなってきている。マーシャル諸島の地域全体が一つの家族、この考え方が私は大好きになった。特に仲良くなったマーシャル諸島の大学生、トトに観光産業のことも尋ねた。発展途上国は発展すべきだ、マーシャル諸島は海に囲まれた美しい島を活かして観光産業に力を入れていくべきだという考えを私は知らず知らずのうちに抱えていた。しかしその考えは必ずしも正しいわけではないと気付かされ、むしろ観光客が増えることによりごみ問題や犯罪が増え、本来のマーシャル諸島の良さが無くなってしまうのではないかと感じた。そしてマーシャル諸島に住んでいる人たちは観光客が来てくれることについてどう思っているのかを調べてみた。その時のトトの言葉と笑顔が私は忘れられない。「観光客が増えることには賛成。でもそれは観光産業によって国を発展させたいからではなく、僕たちが大好きなこの国をより多くの人に知ってほしいから。そして観光にしろ、何にしろ、この島に訪れた人はここの土地を踏んだ瞬間から僕たちの大家族の一員。つまり君ももう僕たちマーシャル人の家族だよ。」この国の魅力はこのような人々の考え方だと、その時私は感じた。

自由時間に道を散策していた時に気付いたことがある。外で座ったり、散歩したりしている人がとても多いということである。特にレ

ジャースポットや遊ぶような場所はもちろんこの国には存在しない。カラオケ、ショッピングセンターはもちろんのこと、映画館すらない。人々に外で何をしているのかと話を聞いてみると、彼らは笑顔で答えてくれた。「何もすることはないが、人に会えば話をすることができるし、子どもたちを眺められるし、そのために外で座ったり、散歩したりしているんだよ。特別、目的はないけれど、楽しいよ。」そう話す人々はみな楽しそうで、きらきらの笑顔に溢れていた。日本には少し物や場所が溢れすぎているのかもしれない。「幸せですか。」私は彼らに尋ねた。「Why not?」彼らは当然のごとく、そう答えた。彼らの笑顔で私も自然と笑顔になった。マーシャル諸島に自殺者はいない。日本では年間自殺者が毎年増加傾向にある。この日本の社会問題の解決のヒントがこの国にはあるのかもしれないと感じた。

帰国後、色々考えた。発展とは何か。豊かさとは何か。幸せとは何か。私が今からすべきことは何か。明確な答えは出ていない。しかし国にはそれぞれの素晴らしい魅力があり、発展することが必ずしも正解ではない。お互いの国の文化や特徴を尊敬し合っていくことが大切なのだと改めて実感した。そして私がこれからすべきことは自分がせっかくいただいた貴重なマーシャル諸島訪問という機会で感じたこと、思ったことを多くの人々に伝えていくことだと考える。マーシャル諸島を一人でも多くの人に知ってもらいたい。プログラムの最後のイベントとして、帰国後、私たちが感じたことや意見などを堺市民の方々に市民ホールで発表する機会が設けられた。当初、マーシャル諸島が発展していくにはどうすべきか、観光産業を発展させるには何が必要かを軸に発表する予定であった。しかし実際、現地へ行き、そこで感じた私の想いを伝えるため、講演では全く違う内容を発表していた。「日本人にあまり知られていないマーシャル諸島をもっと知ってほしい、それゆえ多くの人に是非訪れてほしいと思います。しかし今あるマーシャル諸島の魅力を残すため、あまり多くの観光客の人には行ってほしくないという矛盾した気持ちもあります。観光名所も名産品もないマーシャル諸島ですが、私がもう一度行きたいかと聞かれたら、答えはイエスです。私をそのような気持ちにさせる理由はただ一つ。何物にも代えがたい人々の笑顔がそこにあるからです。マーシャル諸島共和国、そこは私たちが失くしてしまったものが今なお根付く未開の宝島でした。」